



蘇る、蒲生の自然

蒲生干潟と海浜

8月号

盛夏の蒲生干潟と海浜

(7月下旬の蒲生)



干潟や磯の生物（カニや貝、魚やフナムシなど）の生息数が、春先より大変多くなりました。9月になると渡り鳥のシギたちが羽を休めるために飛来してきます。そして、干潟の生物はシギたちに捕食されます。このことで、干潟の生態系のバランスが保たれるようです。



やっと分かりました！
アシの前に生えている植物は
ハママツナ（浜松菜）です。

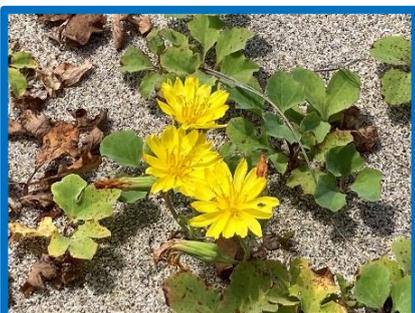


やっと、
見つけました！

OK



「私たちの中野」にも掲載さ
れている**ハマニガナ**でしょう。
花と葉形から識別しました。



ハマニガナ（浜苦菜）（6～8月）



海浜の中ほどに群生しています。
穂から識別するとケカモノハシと思われます。



導流堤を渡ったすぐのところに見かけない植物の群落がありました。そこは砂浜というより砂礫を含んだ浜でした。人の手が入った所のようなです。人里の植物ではないでしょうか？



3つの花弁



蒲生海浜



海浜を歩いていると、どこかでよく見かける花が3箇所ほどに咲いていました。それは、街中の道端でよく見かける雑草の花によく似ていました。

その花の種は、どのようにして蒲生海浜まで運ばれてきたのでしょうか。虫や鳥、それとも風でしょうか。



街中の道端

かつて蒲生海浜で見られた海浜植物



テリハノイバラ (5~7月)



ハマボウフウ (6~7月)



ハマナス (6~8月)



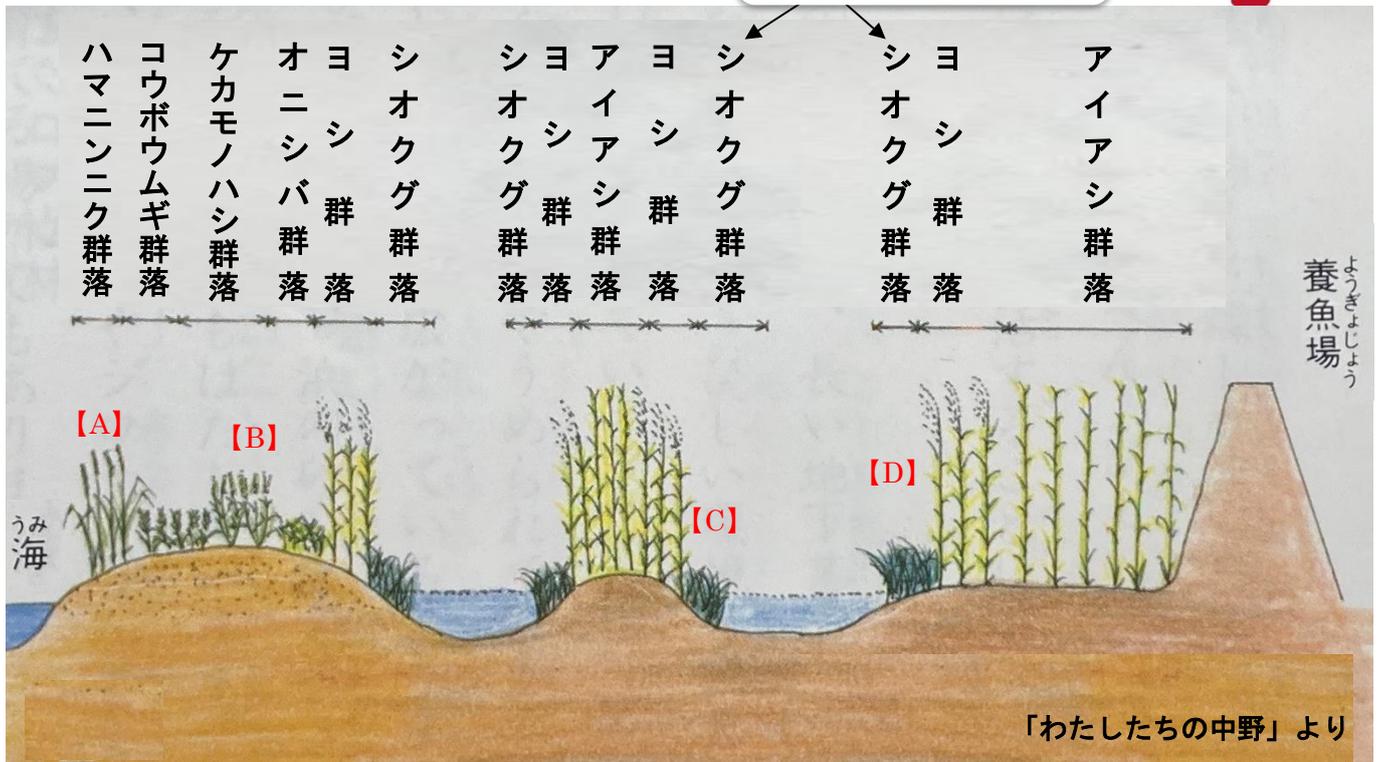
ウンラン (8~10月)



想像していた以上の植物が生えています。
その分布はどうなっているのでしょうか？

蒲生海岸の植物の分布図 (1980年代頃)

ハママツナでは？



蒲生海浜は植物分布の変遷はあっても、空と海の青さと海浜植物の緑の二色に色分けされています。これは今までと変わりありません！



サギ達の雛は幼鳥に成長！



6月26日

3週間後



7月17日



チュウサギの幼鳥は大きくなり、親鳥と見分けがつかなくなりました。それぞれ一点を見つめて静止しています。親鳥の真似をしているのでしょうか。生息数が300羽ほどに倍増したようです。超過密なコロニーです。



ゴイサギは夜行性だそうです。そのためでしょうか、チュウサギとは違い、日中は目につきにくい場所に生息しているようです。この日の幼鳥は人の気配を感じると、親鳥と同じように羽ばたきながら歩いて逃げていました。身を守る術を学んだようです。



ゴイサギの幼鳥

幼鳥の腹が親鳥のように白くなってきました。

ゴイサギの親鳥

余談 渡りを忘れた渡り鳥？ 場所：蒲生干潟から2kmほど

離れた砂押川



何かモでしょうか？



コブハクチョウとオオハクチョウの異種のつがいでしょうか。自然界ではありえないそうです。

白鳥と鴨は冬鳥です。11月頃に大陸から飛来して、2月頃に繁殖のために旅立ちます。

この光景を見るのは、白鳥は3期目、鴨は初めてです。怪我をして飛べなくなったのでしょうか？それとも、ここの人里が住みやすくなったのでしょうか？



親ガモが10羽ほどの子ガモを連れて泳いでいます。カモの産卵数は1~13個だそうです。

カルガモであれば留鳥

蒲生干潟の変遷

仙台港の変遷の様子です。津波の影響で蒲生干潟が狭くなったことがよく分かります。



写真のほぼ全域に、津波が押し寄せてきました。

おかげさまで
仙台港は開港50周年を迎えました

サギのコロニー

太平洋フェリー

蒲生干潟

みやぎ県政だより 7.8月号より

仙台港は令和3年7月で開港から50周年を迎えました。皆さんと共に発展を続けてきた仙台港。これまでの歴史を振り返りつつ、さらさらなイベントを通して仙台50歳の誕生日をお祝いします。

仙台港は国際貿易港で東北の海の玄関です。さらに、苦小牧と名古屋へフェリーが就航しています。干潟には海外から野鳥が飛来してきます。仙台港周辺は人と物、そして野鳥が行きかうエリアです。海の貿易拠点と自然が隣り合わせとなっています。

みなとオアシス仙台港

仙台港周辺は、ショッピングやイベント、レジャー施設などが充実しており、海の貿易拠点としての機能だけでなく、県民や観光客など皆さんが利用できる賑わいの施設がたくさんあります。

- A 三井アウトレットパーク 仙台港
- B 夢メッセみやぎ 仙台港国際ビジネスサポートセンター
- C 天然温泉海神の湯ドリーミン EXPRESS仙台シーサイド
- D 仙台商みの杜水族館

- E キリンビール仙台工場 キリンピアポート仙台
- F スリーエム仙台港パーク
- G フェリー埠頭ターミナル
- H 向洋海浜公園



蒲生干潟は「みなとオアシス仙台港」の中には入っていません。なぜ？

蒲生の地域は、自然現象としての津波の跡と自然災害としての津波の跡が隣り合わせとなっています。そこは、自然の力と人の力で蘇ろうとしています。